

研究主題 「生き生きと学び、主体的に取り組む児童の育成」

～自己の考えを広げ深める「対話的な学び」を中心とした、
わくわくがにつながる道徳教育を目指して～

幸手市立さくら小学校

1 研究主題の設定理由

未来が予測できない VUCA 時代には、想定外の事態に柔軟に対応できる能力や多種多様な価値観をもつ者とのスムーズなコミュニケーションがとれる能力などが必要になる。多様な価値観を受け入れ、他者と対話し協働しながら、物事を多面的・多角的に考えることが求められている。

本校は、令和5年度から、幸手市教育委員会・幸手市教育研究会の委嘱を受け、国語科を中心とした学力向上に取り組んでいる。また、令和6・7年度、食育指導研究モデル校として食育にも取り組んでいる。道徳教育はもちろん、学力向上や食育指導の面からも、人との繋がり、自分自身との対話、他者との対話を通して、自分自身の生き方について、主体的に考え、よりよく生きようとする児童を育てたいと考え、本研究主題を設定した。

2 研究の仮説

- (1) 国語科でも研究している対話的に学び合う授業を実践すれば、児童が自己を見つめ、道徳的価値について自分事として捉え、自分自身を語るができるようになるであろう。それにより、人との関わりを通し、自己有用感が高まるとともに、よりよい道徳性の育成につながるであろう。
- (2) 道徳科の学びを核として、さまざまな要素をつなげ道徳的価値を意識してカリキュラム・マネジメントを推進すれば、道徳教育の質の向上を図ることができるであろう。
- (3) 家庭・地域とさくら小学校の道徳教育の目標を含めた方針・方向性を共有する取組の推進をすることで、道徳的実践意欲を高め、児童が生き生きと日々学び、何事にも主体的に取り組むことができるようになるであろう。また、幸手中学校と連携することで、9年間を通した系統的な学びにも繋がり、深まりのある道徳教育となり、児童の豊かな心を育むことができるであろう。

3 研究の経過

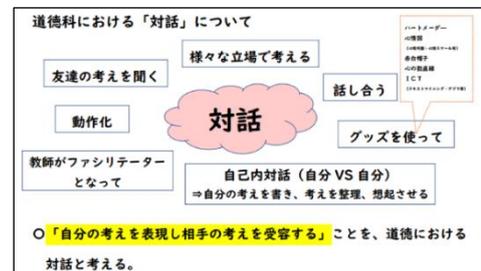
月	内容
4月	○研究の概要や方針などの共通理解 ○校内研修（プランニングシートの作成と活用について）
5月	○プランニングシート作成及び検討会
6月	○アンケートの実施と分析 ○幸手市年次研修（1年2組）

7月	<ul style="list-style-type: none"> ○幸手市年次研修（4年1組、こすもす1組、5年2組） ○プランニングシートを活用した検討会 <ul style="list-style-type: none"> ・2年「ぐみの木と小鳥」（学研） 指導者：幸手市教育委員会学校教育課主席主幹兼主席指導主事 山本 直人 氏 ・4年「雨のバス停留所で」（学研） 指導者：幸手市教育委員会学校教育課主幹兼指導主事 藤原 祐介 氏 ・6年「ぼくの学校を一番に」（彩の国の道徳） 指導者：玉川大学教師教育リサーチセンター客員教授 藤澤 由紀夫 氏 ・こすもす学級「だれも見えていない」（学研） 指導者：幸手市教育委員会学校教育課主幹兼指導主事 藤原 祐介 氏
8月	<ul style="list-style-type: none"> ○「道徳教育 匠の技の伝承事業」 指導者：帝京大学大学院教職研究科教授 藤澤 美智子 氏
9月	<ul style="list-style-type: none"> ○全学調・県学調結果分析研修 ○幸手市教育委員会・東部教育事務所教育支援担当・学力向上推進担当学校訪問 6年2組「ぼくの学校を一番に」（彩の国の道徳） 指導者：東部教育事務所教育支援担当指導主事 富山 めぐみ 氏
10月	<ul style="list-style-type: none"> ○プレ授業の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・2年1組「ぐみの木と小鳥」（学研） 指導者：幸手市教育委員会学校教育課主席主幹兼主席指導主事 山本 直人 氏 ・4年1組「雨のバス停留所で」（学研） 指導者：幸手市教育委員会学校教育課主席主幹兼主席指導主事 山本 直人 氏 ・こすもす1組「だれも見えていない」（学研） ○研究発表に向けた環境整備
11月	<ul style="list-style-type: none"> ○埼玉県道徳教育研究推進モデル校発表（7学級公開） 指導講評：埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課指導主事 土井 鉄平 氏 鼎談テーマ：対話的な学びを生かした道徳教育の充実 ～一人一人のよさや可能性を引き出すために～ 鼎談者：十文字学園女子大学 教授 富山哲也 氏 十文字学園女子大学 教授 浅見哲也 氏 幸手市教育委員会 教育長 山西 実 氏
12月 ～ 3月	<ul style="list-style-type: none"> ○教職員アンケートの実施 ○2年間の研究の総括と次年度に向けて

4 研究の内容

(1) 授業研究部の取組

①対話的な学びの共通理解：道徳科における「対話」について捉え、全教職員で共通理解を図った。話し合ったことをもとに、日々の学級経営の充実や国語科の研究とのつながりを大切にした授業づくりに取り組んだ。



②県独自の道徳教育教材資料集「彩の国の道徳」の活用

「彩の国の道徳」の活用については、幸手市の郷土資料とともに、年間に2～3回は取り扱うように計画、実施した。また、道徳日より「とくの日だより」に家庭用「彩の国の道徳」を掲載することで、家庭での話題となるように発信している。

③プランニングシートの作成：プランニングシートとは、授業の骨格部分を考えるものである。各自でシートを作成し、それをもとに検討を重ねる。その後指導案を作成し、研究授業を行う、という形でシートを活用した。授業に関する考えをアウトプットすることで、よりよい授業づくりについて議論しやすくなったり、考えやすくなったりした。

④充実した校内研修：年度当初には道徳の授業開きやプランニングシートについての研修を行った。夏季休業中には、県の「道徳教育 匠の技の伝承事業」の機会を利用し、道徳の授業の組み立て方や指導案作成の方法などについて、学びを深めることができた。



(2) 環境整備部の取り組み

①道徳教育と関連付けた廊下掲示：全教育活動を通して道徳教育の充実が図れるよう、各行事を道徳教育に位置付け、会議資料にも内容項目を記述することで、教職員がそれを意識して指導できるようにした。



②小中統一の道徳コーナーの設置：道徳教育における4つの視点を児童でも分かるよう平易な言葉を用い各教室に掲示した。



③道徳通信の発行：毎月19日を「とくの日」とし、道徳通信を発行した。道徳の授業の取組や各月に設定したテーマについて紹介した。学校での取組を道徳通信として発行することで家庭や地域との連携に努めた。

上記のほか、人的環境の整備という視点から、幸手中学校との挨拶運動の実施や地域人材や外部講師との連携、掲示資料やハートメーターなどの教具の作成などに取り組んだ。

5 研究の成果と課題

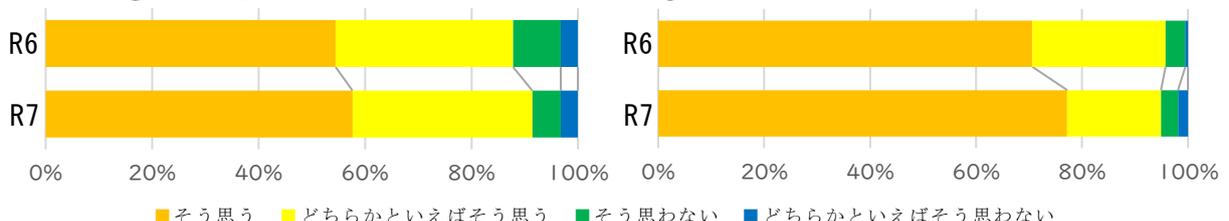
(1) 成果（調査統計部の取組）

○全校児童アンケート調査（R6、R7実施）の結果より

以下の2つの質問に対し、全体の90%以上の児童が肯定的に回答した。

①道徳の授業がすきですか。

②道徳の授業が自分のためになると思います



表：非認知能力の結果
(埼玉県学力・学習状況調査より)

		非認知能力	
		自己効力感	向社会性・自制心
4年生	学年平均	3.9	4.0
	県平均	3.8	4.0
5年生	学年平均	3.4	4.1
	県平均	3.6	4.0
6年生	学年平均	3.7	4.0
	県平均	3.6	3.9

表：「規律ある態度」アンケートの結果

内容	項目	小4	小5	小6	
はじめのある生活ができる	1 時刻を守る	①登校時刻	87.3	91.2	95.1
		②授業開始時刻	88.9	92.6	96.7
	2 身の回りの整理整頓をする	③靴そろえ	73.0	79.4	85.2
		④整理整頓	77.8	63.2	90.2
礼儀正しく人と接することができる	3 進んであいさつや返事をする	⑤あいさつ	79.4	89.7	86.9
		⑥返事	92.1	94.1	91.8
	4 ていねいな言葉づかいを身につける	⑦ていねいな言葉づかい	84.1	89.7	95.1
		⑧やさしい言葉づかい	81.0	82.4	95.1
約束やきまりを守ることができる	5 学習のきまりを守る	⑨学習準備	87.3	86.8	93.4
		⑩話を聞き発表をする	82.5	79.4	82.0
	6 生活のきまりを守る	⑪集団の場での態度	85.7	79.4	93.4
		⑫掃除・美化活動	87.3	82.4	85.2

○埼玉県学力・学習状況調査（R7実施）の結果より

非認知能力（自己効力感、向社会性）については、いずれの学年も県平均と同程度の結果となった。

○「規律ある態度」アンケート（R7実施）の結果より

県が示す目標値80%以上を多くの項目で達成した。

○教職員から

- ・プランニングシートの作成を通して、ねらいに迫る発問とそれを深めるための補助発問を考えやすくなった。
- ・教師自身も共に考えることで、より児童の本音を引き出せるようになった。
- ・対話的な学びを通して、自分の意見と他の人の意見を比べたり、意見を受け止めたり、認めたりすることができるようになってきた。

(2) 今後に向けて

- ・プランニングシートの継続的な活用：プランニングシートを活用した授業づくりは教職員にも浸透してきており、シートを活用することによる一定の成果も感じている。今後も継続的に使用していくことで、改善を加え、よりよい授業づくりに関する実践を積み重ねていきたい。
- ・言語環境の整備：児童が自分の考えを、より正確に表現するためには現在取り組んでいる実践からさらに改善を加えた取組が必要である。対話を通して自分の意見をまとめたり、多くの語彙を身に付けたりすることができるように検討していきたい。
- ・他教科における対話的な学びの推進：これまで取り組んできた対話的な学びに関する本校の研究は、他教科・領域をはじめとする全ての教育活動の土台となる部分だと考える。そのため、本研究で得た成果を基に他教科・領域においても、課題の解決やよりよい考えを形成するために対話的な学びを活用できるようにしていきたい。
- ・小中連携の推進：今回の研究においても、プランニングシートの活用や挨拶運動の実施、掲示物など、物的環境や施設環境を中心に小中連携を推進してきた。これらに加え人的環境の連携などを通して、小学校での学びをさらに発展させることができるように、義務教育段階の9年間を見通した研究を一層推進していきたい。